
鹿野齒科へようこそ!

美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鹿野齒科へようこそ！

【Nコード】

N7404U

【作者名】

美月

【あらすじ】

物語の主人公というのは、生まれが特殊だったり、育ちが特殊だったり、はたまた特殊な能力をその身に宿していたりするもんだ。けど、そうだな、もし、俺に一つ何かあるとすれば、それは歯医者がとてつもなく嫌いということだ。

プロローグ（前書き）

自作3作目です。場当たりの作品ですが、宜しく願います。
コメディになっているかとても不安です。

ブローグ

俺は歯医者が嫌いだ。

だからよく歯も磨くし、甘いものだって極力さけて生きてきた。なのに、なんだってこんなに右の奥歯が腫れあがっているんだ？俺は洗面所の鏡にうつる自分に問いかけた。

「おまえ、いったい何やったんだよ……」

現実はいたって単純明快だ。親知らずである。どれだけ虫歯に気をつかい、歯の健康を維持していたって、こいつはどうしようもない。

しかし痛い。

とてつもなく痛い。

俺がなにをしたっていうんだ。ちくしょう。

それでも俺は粘りに粘った。痛み止めの薬をたらふく飲んだり、気づいたら親知らずがなくなってるんじゃないかと神様に祈ったりもした。こんなときだけ神様に祈る俺はそこらじゅうにいる都合のいい高校生たちとさして変わらない。当たり前だ。俺だってそこらへんにいる普通の高校生だ。

ただ、普通の高校生はここまで歯医者嫌がらないかもしれない。我慢に我慢を重ねた結果、事態は急激に悪化した。俺はようやく覚悟を決めて家から最も近くにある歯医者の正面までやってきたわけだが……

「外観はいい感じだ。新築で綺麗だし、きつと若くて優秀な先生がいるに違いない。美人だったらなおさら歓迎だな。みとれてしまつて痛みなんて忘れてしまふかもしれない」

そうやって俺は自分に言い聞かせながら、『鹿野歯科医院』と書かれた扉を開く。キンコンと患者の来たことを知らせる電子音が鳴ると奥から可愛い少女の声が聞こえてくる。

「はいはい！ いま行きまーす」

奥から現れたのは、

頭を覆い尽くす程の鹿の頭をかぶった『何か』だった。

「歯科だけに鹿！ ダジャレか！」

自らのツツコミと同時に俺の思考回路はそこで確実に一度死んだ。現実問題、鹿の頭をかぶった『何か』、いや、よく見れば小学校高学年くらいの少女だろうか、顔は鹿の所為で見えないけれど、声から推測するに可愛らしい少女に違いない。服はなぜだろう、白衣を着ている。歯医者だから当たり前といえはそうなのだが、駄目だ、これ以上考えてしまうとおかしいフラグをたててしまうかもしれない。現実にはあり得ないとわかっていてもだ。まずい、アニメの見過ぎだ。ついに二次元の考え方が俺の脳内を蝕み始めたようだ。

俺はそこまで考えると、踵を返して帰ることにした。歯は痛いけど仕方ない。駅前の別の歯医者にしよう。俺は心に決めた。不思議なことにあれほど行きたくなかった歯医者に行くことは前提として決まっていた。変なものを見たせいだろう。俺が黙って帰ろうとすると後ろからシャツの裾をグイと引っ張られた。

「まてや、こらっ！ 逃げんじゃねえよ」

「……はい？」俺の口から思わず声が漏れた。

「歯がいてえんだろ？ 右の頬が腫れてんじゃねえか。仕方ねえから急ぎで診てやるよ」

えーっと……、なんだろこれ、どうなってるんだ？ 鹿が超絶可愛い声で、俺に啖呵切ってたんだけど、この場合、普通の高校生はどう接したらいいんだろう。母さんも父さんも学校の先生も喋る鹿との接し方なんて教えてくれなかったぞ。

「まあ、いいわ、とりあえずそこ座れや」少女は俺を簡単に玄関から引き剥がすと決して広くはない待合室の四人がけのソファに強引に俺を座らせた。なんちゅう力だ。ガキの力じゃねえぞ……

「で？ どこが痛いんだ？」

俺は真面目といつかなんといつか素直に親知らずのことを話そうとしたが、

「さて。言わなくてもわかる……」

目の前の鹿はビシツと手を俺の前に突き出してこう言いやがった。

「鹿せんべいの食い過ぎだな」

「食わねえよ！ てか、何？ どこが痛いかの話じゃねえの？」

「おおっ！ すまんすまん。心が痛いんだったな」

「歯だよ！ 右奥だよ！ 親知らずだよ！ 腫れあがってんのが見りゃわかんたる！」

そこまで言うとは鹿が黙りこんでしまった。まずい。言いすぎたか？ けど俺だつて歯がめちゃくちや痛いんだ。今の俺に少女と遊ぶ余力なんて残つてやしないんだ。

「貴様いつたい何者だ？ 『だよ』の三段活用とは貴様只者ではないな」

「なんの話だよ！ ここは歯医者じゃねえの？ 治してくれないなら帰らせてくれよ」

「しかしだな……あ、今の『しかし』は歯医者の歯科とかこの頭の鹿とかけたわけではないぞ？ あくまで不可抗力だ」

「だめだ……話になんねえ……」

「あ！ 先生！ またそんなものをかぶつて！ 患者さんがびつくりするじゃないですか」

俺が頭を抱えていると現れたのは、女神さまだった。

美しい声とサラサラの長い黒髪。透き通るような肌。俺にもつと語彙があればこの美しさを伝えることもできるんだが、仕方がないから俺のまぶたにだけ焼き付けることにしよう。

俺が玄関先で考えたフラグが回収されるとは。ん？ 待てよ？

「えーっと。あなたはこちらの先生ですか？」

俺は恐る恐る女神にお話を伺おうと試みた。

出来ることなら、今俺が考えているようなことはあってはならない。頼む！ 神様！

「いいえ。私は歯科助手ですよ。先生は今あなたの目の前にいるじゃないですか」

……………。

やってしまった……いやな予感はずーっと、していたんだ。

鹿が白衣を着ていることもおかしいと思った。でも考えないようにした。

女神が現れた時、俺は歯医者には来ないけどテレビで見たことのある助手の服を女神が着ていたのを見ても見ていないことにした。

女神の口から最初に「先生」と聞こえた時も聞こえないふりをしたかった。

俺の前では鹿が両手を腰にあてふんぞり返っている。

「偉そうに見えねえよ……」俺のツツコミにも力が失われつつある。

「なんだ……つまんない」そういつて鹿は鹿の頭かぶりを脱ぎ捨てた。

そこで俺の思考回路はもう一度死んだ。

想像以上の美少女だった。日本人離れした顔立ちで、ありきたりな言葉を使えば人形かと思うほどに美しく可愛らしかった。ここまです金髪の似合う少女を実際に見たのは初めてだ。

「とりあえず、貴様の親知らずをサクツと抜こう！ それから貴様の正体を聞こうじゃないか」

正体ってなんだよ……と思いつつも俺は素直に治療室に連れて行かれた。俺って騙されやすいのかな、こんな危ない奴について行くなんて。けどその時の俺はとにかく歯の痛みから解放されたかった。治療室はいたって普通で、治療が始まると金髪の美少女がこんなことを言った。

「とりあえずボケずに一回治しちゃうから。ツツコミの君には苦痛かもしれないが、許してくれ。すぐにすむ。——奈緒 頼む」

「はい。先生」

奈緒と呼ばれた女神は、俺に神々しいまでの笑顔を浴びせかけると俺は天国にでも来たんじゃないかと錯覚した。それと同時に奈緒さんは俺のみぞおちを思いきり殴り飛ばした。

「なん……でや……ねん……」俺は本当に天国へ飛ばされた。

気がつくと待合室のソファーに寝かされていた。上体を起こすと金髪少女が隣にいた。

「具合はどうだ？ まだ痛むか？」

聞かれて俺はハツとした。右手を頬に当てると腫れが引いている。あれほど俺を悩ませた痛みもどこかへ旅に出たようだった。旅に出たままもう一生帰ってこなくていいと思う。

「麻醉が切れたら、また少し痛むと思うが、今まで程の痛みはないはずだ。その痛みもじきにひくだろう」

「麻醉って……」俺は訊きながらみぞおちの辺りをさすった。少女は無邪気に笑いながら、

「あれは麻醉とは別だ。貴様は歯医者が必要以上に恐れているようだったから、意識を断っておいた。暴れられても面倒だからな」

確かに、俺からしてみれば、鹿の相手をして気が付いたら治ったようなものだ。こんな容姿だけど、ほんとに腕がいいのか？

「そうそう。抜いた親知らずだが持つて帰るか？」少女は白衣のポケットから取り出したものを俺の手に乗せる。俺はそれをまじまじと見つめながら、

「おおっ！ これね、こいつが俺を悩ませた諸悪の根源か。それがこうして掌に収まっているのを見ると実に愛らしく見えるなあ……俺の前歯。って、前歯かよ！ 親知らずだろ！ てか、誰の歯だよ！ 俺の前歯は今も口の中で絶賛大活躍中だよ！」

「すごい……親知らずを前歯に変えるといった、とてつもなく微妙なボケに対してここまでツッコむことが出来るとは……しかもノリツッコミ……だと……貴様、化物か……」

「いや、別に普通だろ。じゃ、俺、帰るからさ。いくら払えばいい？　一応保険証も持ってきたんだけど、診察券とかも作るのか？」

まあ、もう来たくないから診察券はいらないんだけど」

「うつつ……なーおー。患者が騒いでるからなんとかしてー」

「正当な疑問だろ！　騒いでねえし」

「はいはい、どうされました？」助手の奈緒さんがやってきたので、俺は仕方なくもう一度同じ質問を繰り返した。

「ああ。それなら問題ありませんよ。タダですから」

神スマイルを浴びせてくる。俺はこの笑顔に対して金を払わなければいけないんじゃないかと、馬鹿な考えを持つようになっていた。「へ？　タダ？」

「はい。そのかわり明日から毎日いらしてください。先生はあなたを大変気に入ったようですから」

俺が金髪先生へ視線を移すと、少女は恥ずかしそうにモジモジしている。可愛い、これは抱きしめたくなる可愛さだ。けど、そんなことは二次元でも許されていないんだから、理性で対処した。

「先生は俺のどこが気に入ったんですか？」俺は純粋な疑問を口にした。

「ツッコミ」

「そこかよ！」想像の範疇だったので、間髪いれずにツッコんでやった。ちくしょう。頭にくるくらいキラキラした笑顔をこっちに振りまいてきやがる。今のはサービスしすぎたか？　たまりかねた俺は今更すぎることを聞いた。

「先生、名前は？」

「野村幸子」

「鹿野歯科と関係ねえ！　てか普通かよ」

そう、こうして俺は幸子と出会ってしまった。まったくもって愉

快な生活の始まりだった。

プロローグ（後書き）

まず始めに、あらずじがあらずじになっていないことをお詫び申し上げます。

あとは、こんなこといったらあれですが、連載するかわかりません。だって、場当たり的ですから……

誰かしら面白いと言ってくくださる方がいれば、書くと思います。やっぱり求められるものを書きたいですからね。

今日のキャラクターからの一言。

幸子「幸子大先生の活躍を楽しみにしているがいい」

人物紹介

一週間後。

俺は終業のチャイムを聞き終える間もなく片づけを始める。

そうしないと、隣のクラスの『あいつ』に捕まってしまうからだ。

「いた！ ねえ、カズ、今日あんた暇でしょ？ 私の買い物に付き合いなさいよ」

「断る」俺はきっぱりと言った。

「……あんた最近付き合い悪いわね。彼女でも出来たの？」

目の前のツインテール女子が俺をにらみつける。

「そんなんじゃないやねえ！ 行くとこがあんだよ」

「ふーん……ま、どうせヲタクな店でしょ？ 今日は何の発売日？ ゲーム？ 漫画？ ま、確かにカズに彼女なんてできるわけないわよね。このヲタク野郎！」

『村瀬詩織』はいらん捨て台詞を吐いて隣のクラスへ戻っていった。俺との関係は、まあ簡単に言うとお馴染みだ。小中学校も同じの腐れ縁。家も近所なわけで、色々世話焼いてくるめんどろなやつだ。さらに頭脳明晰・容姿端麗ときたもんだ。中学校じゃ結構人気もあったし、高校生活が始まってまだ一ヶ月しか経っていないにもかかわらず、ファンクラブまでできているらしい。

アニメじゃ間違いなくテンプレの幼馴染キャラなんだが、冗談で詩織にそのことを言ったら、

「バツカじゃないの！ アニメの幼馴染キャラって主人公のことが好きなキャラでしょ？ なんて私がカズのこと……アニメと現実を混同すんな！」

と言っと思いつきりとび膝蹴りをお見舞いされた。わかってるよ。俺だって別に詩織とそういう風になりたいわけじゃない。二次元と現実が違うことぐらいよくわかってるさ。

だから、詩織も早く彼氏を作って俺なんかを誘わずにそいつと

買い物に行けばいいのさ。

そして、俺は自宅近所の『鹿野歯科医院』の扉を開く。

見た目は少し大きめの一軒家。一階をそのまま歯医者に改装してある。

「はいはい、あ、カズ君！　こんにちは。今日も来ていただいてありがとうございます。とりあえず二階へあがってください。今日は隣の佐藤さんから戴いたサクランボがあるんです。先生もお待ちですよ」

この神々しい笑顔の持ち主は『鹿野奈緒』さん。一九歳。通称『戦いの女神』っていうのは俺の心の中にしまっておく。

この女神はきれいな顔して俺を右拳一発で気絶させる力の持ち主だ。喧嘩したら勝てそうにない。絶対に怒らせてはいけない人である。

ちなみに一週間通って分かったことは、どうやらこの奈緒さんがこの家の主であり、もとは奈緒さんのお父様がここで開業していたそうだ。

そのあと『なんやかんや』あつて、訳の分からない金髪美少女が、後を継いでいるということらしい。『なんやかんや』っていうのは、色々複雑な事情がありそうで、出会って一週間そこの俺が聞くに聞けないからである。

奥の階段を上ると広いリビングに繋がっている。二階にはリビングとは別に部屋が四つ。外から見るとこの家は随分と広いようだった。二つは奈緒さんと金髪の部屋。もう一つは使われていない。一番奥の最後の部屋は鍵が掛かっていて開かない。奈緒さんに聞いたら、

そこは『入ってはいけない部屋』としか説明してくれなかった。まあ、鍵が掛かっているんだから、入りたくても入れないわけだが。「遅いぞ、カズ！　居残り授業か？　サクランボが冷めちゃうじゃないか」

すでにリビングの椅子に陣取り、バカみたいなことを言っている金髪バカこそ、現在、鹿野歯科医院で、唯一の歯科医、『野村幸子』である。

「それを言うならお茶が冷めるだろ！ 新鮮フルーツを冷めると表現する国がどこにあるってんだよ！」

俺は、どうでもいい幸子のボケに対してツツコミを入れてやる。

幸子は俺のツツコミが気にいっているらしい。

幸子はつまらないことが嫌いだ。そりゃあ、誰だって楽しくて面白いことの方が好きに決まっている。だが、幸子は特に自分がつまらないと言われるのが嫌いらしい。野村幸子という名前も普通すぎて嫌いなんだそうだ。もっと面白い名前が良かったとこの前ボヤいていた。歳を聞いたら一発殴られた後に「一二歳。小学六年生だ。文句あるか、この野郎」と言われ、俺が「なんだ、年相応に見えるんだな」と答えると、ひどく落ち込んだ。実年齢と見た目にギャップがあればそれだけで面白いと思っているらしい。口調がちよっとおかしいのも頑張って面白くしようとしている結果だと奈緒さんが教えてくれた。

とにかくこの野村幸子という普通な少女は面白さに飢えているのだ。

けど、一二歳で歯科医って全然普通じゃないな。

「で？ 今日の俺は何をすればいい？」

「うーん……テレビでも観てゴロゴロしてればいいんじゃないか？」

俺がここにきて一週間。

最初は男手が足りなかったこともあって、大量の資材整理とか、手の届かないところの掃除とか力仕事全般、歯科医院に関わることを手伝わされた。

だが、それも通って五日もするとさすがにすることが無くなり、いよいよもって、俺がこの歯科医院に来る理由がなくなった。

奈緒さんはそれでも「先生が気に入っているのだから来てください」

と俺に頭を下げるので、俺も断れずにズルズルと来てしまっているのだが、昨日も一昨日も幸子とテレビを観ながら、ああだこうだ言い合っている。華の高校生がこれでいい訳がない。

「よし！　じゃあ恒例のツツコミバーゲンセールでもやろうぜ！」

「あ？　なんだよそれ！　勝手に恒例とか決めんな！」

「いやー、しかし暑いですねー」

「うわっ！　勝手に始めやがった！　てか暑くねえし！」

「暑いと言えばこの前貸した本読んだ？　面白かったでしょ？」

「暑いの意味がちげえよ！　そもそも本を借りてねえから！」

「え？　昨日『ガラパゴス諸島の生態系について』って本貸したじゃん！」

「いやいやいやなぜガラパゴス？　逆に貸せよ！　興味あるわ！」

「え？　私に興味がある？」

「ねえよ！　どうしてそうなった！　って、勝手に落ち込んでんじやねえ！」

「はいはい！　ストップです！　先生がノックアウトされたので、おしまいでーす。記録は四ツツコミです。ガラパゴスのライオンは判定がやや厳しかったようですね。新記録ならずです」

「あのー、審査って奈緒さんがしてるんですか？」

「はい。審査員兼解説兼先生側のセコンドです」

「え？　何？　これ、格闘技なの？」

【キンコーン！】

などとやり取りをしていると歯科医院に誰かが来たようだ。

俺の知る限り、俺以外の初めての客がやってきたのだ。

人物紹介（後書き）

物語が展開するのはこの後です。
はたして僕にコメディイが書けるのか……
謎です。

今日のキャラクターからの一言。

カズ「ツツコミって大変なんだぜ！」

人物紹介2

『工藤和也』は私の幼馴染でキモいヲタク野郎。

家が近所で、親同士の仲が良かったから、自然と一緒にいることも多かった。

見た目に関して言えば、そこまでヲタクっぽくないし、

まあ、好みもあるだろうけど、そこまでかっこ悪い訳じゃないと私は思う。

成績は中の下。

本当はもつと出来るのに、カズは全然勉強をしない。あ、カズはあいつのあだ名。

高校受験のとき、将来に響くからって無理やり勉強させたら、入試でトップの点数を叩きだした。

本当はカズが入学式で新入生代表の挨拶をする筈だったのに、代わりに私が代表にさせられた。

カズは、

「僕がトップの点数をとれたのは村瀬さんに懇切丁寧に教えて頂いたおかげなんです。

中学時代の成績だって村瀬さんの方が断然良いのは先生方もご存知ですよ？

僕のような駄目人間をここまで押し上げた村瀬さんこそ生徒代表に相応しいと思います」

とかなんとか心にもないことを言ったらしい。

お陰で私は必要のない注目を浴びてしまった。

ファンクラブなんていうのも存在しているらしい……いずれ潰さないといけないわね。

って、そんなことはどうでもいいのよ。

今大事なのはカズの様子がおかしいってこと。

あいつは私の誘いを『二度』続けて断ることは絶対しない。

それが今週、立て続けに『三度』も私の誘いを断った。
いつもだったら断った後に

「ごめん、また埋め合わせするから」

とかいって、わざわざ隣のクラスの私のところまで会いに来てくれたのに……

今週はそれすらなかった……今日だってそう。

絶対におかしい。

だから、そそくさと逃げるように帰るあいつの後ろをここまで追いかけてきたんだけど、

これっていつもの帰り道よね？

まっすぐ帰るつもり？

私の誘いを蹴って？

ありえないわ！

目の前のカズは私に尾行されているとも知らずにのんきに歩いている。

あれ？ あんたの家はそこを右に曲がる筈でしょ？ どこ行くのよ。

カズは普段なら右折する個所をまっすぐ進み、次の角を左に曲がった。

私は急いで曲がり角まで行き、慎重にカズの様子を覗いた。カズは白い一軒家にインターホンも押さずに入っていく。私はすかさず、家の前まで走る。

自分の目を疑った。

「歯医者さん？ 嘘でしょ？ ありえないわ。あいつがこんなところに来るなんて……」

おもわず声に出して叫んでしまった……確かにこの前一緒に映画に行ったときはずっと辛そうな顔をしていたし、聞いたら「歯が痛い」とも言っていた。

でも、今週会ったらすっかり元気になってカズの顔にも笑顔が戻っていた。そのときに行った歯医者さんなのかしら。でも、治った

のになんで歯医者に通うわけ？ わけがわからないわ！

「ちょいとお嬢さん。そこで何しているのかな？」

「ひゃい？」

しかめっ面で腕組みをしていた私は、不意に横から声をかけられて、おもわず声が裏返ってしまった。

そこにはシャツに水色のカーディガンを羽織ったさわやかな青年が立っていた。たぶん大学生くらいだと思う。第一印象は奥様方に人気の出そうなルックスだなといった感じ。

なんか私の声に向こうも少なからず驚いてしまったみたいで、

「うわあ！ ごめんごめん。驚かすつもりはなかったんだ。ただ、人の家をただならぬ感じで睨みつけているものだから、何事か思ってたね」

「あ、すつ、すみません！ あなたはここの先生ですか？」とつさに口走った。

「僕？ はははっ！ 違うよ。僕はここの患者さ！ あっ！ わかった！」

「え？ 何がわかったんですか？」私はうつかり聞いてしまった。今考えると完全にこの男に主導権を握られていたんだと思う。

「君ここに歯を診てもらいに来たんだろう？ わかるよ。歯が痛くてしかめっ面になっていたんだ！ それならそうと言ってくれればいいのに」

「……はい？」私はまるで見当違いな彼の妄想にあっけにとられ、茫然と立ちつくした。

男は私の手を取って進み、『鹿野歯科医院』と書かれた扉に手をかける。私は慌てて、

「ちよつ、ちよちよつと待つてください！ 私、まだ心の準備が」

「……わかるよ。歯医者に入るときって、最初は勇気があるよね。」

大丈夫。僕と一緒に入ってあげるよ」男は諭すような優しい笑顔で私に微笑みかける。

駄目だ……まるでわかってない……私が躊躇しているのは、中にカズが居るからってことなの！ 歯が痛くないのに歯医者に来たなんて知られたら、

後につけてきたことがバレちゃうじゃない！ ああ！ どうしよう！

【キンコーン！】

扉を開くとそこにカズの姿はなかった。

「はいはい。いま行きまーす」

代わりに奥から美しい女性の声がした。

人物紹介2（後書き）

四日置きに更新するはずが、遅くなってしまった……

今日のキャラクターからの一言。

詩織「読んでくれてありがとうなんて、全然思っていないんだからっ
！」

勘違い青年

おいおいおいおい！　どういうことなんだ？　これは……
なんで詩織がここにいるんだよ。あいつ歯が痛いなんて言っ
てたか？

てか、隣のやつは誰なんだ？

「何をしているんですか？」

俺が階段脇から待合室を覗いていると、奈緒さんが不思議そうに話しかけてきた。

幸子は真っ先に待合室に飛んでいき、今は詩織の横にいるさわやかな好青年と言葉を交わしている。

「何って言われましても……」

正直、言葉に困った。どう考えても今の俺は不審な動きをしているだろう。

「あ、あれです。ほら、俺ってこの従業員じゃないですし、患者さんの前に出るのはおかしいでしょ？」

「別に構いませんよ？　ウチは小さな歯科医院ですから」

奈緒さんは笑顔で俺の背中を押す。

すっげえ力だ。

いったいこの細腕のどこにそんな力があるっていうんだ……腕相撲の世界大会にでも出ればいいのに。

「おい、菊池。お前の歯はとくに治ってるぞ？　なんでまた来たんだ？」

「えー、先生冷たいなー。今日は定期健診でもしてもらおうと思っ
てきたんですよ」

「菊池……、普通、定期健診てのはな？　半年くらい間をおいて来るもんなんだ。お前、先月治したばかりだろ」

「そうなんですか？　けど、ほら！　今日は患者さんを連れてきま

した！」

などというやり取りが目の前では繰り広げられていた。

医者だとはいえ、間違いなく年上の人間に向かってこの態度は、さすがといえさすがだ。

どうやら彼はここの患者さんらしい。

そして、詩織はこの好青年（たぶん年上）に連れてこられたと。

詩織のやつ、ほんとに歯が痛いのか？ 確かにここは詩織の家の

近所でもあるわけだし、

いや、でも……

「患者？ この娘がか？ ふーん……」幸子が詩織を凝視する。

そのまま詩織の正面まで来ると見上げるような形で詩織の顔をまじまじと見た。

「娘。名は？」

「詩織です」

目の前の白衣を着た少女に真面目に答える詩織。少しは不思議に思わないのだろうか。

いや、あつけにとられて、聞かれるがまま、喋ってしまったの

かもしれないな。

「どこが痛いんだ？」

「え、えーっと……お、奥歯が……」詩織の言葉に幸子が目を細めて、

「ふーん……そんな風には見えないんだが……」

「そ、そんなことないです！ すごく痛いです！ もうやんなっちゃうくらい」

「どんなふう痛い？」

「えっ！ ギ、ギシギシ？ かな？」

「ギシギシねえ……おい、カズ。詩織ちゃんに得意のツツコミをかましてやれ。俺が許す」

「は？」唐突に話を振るんじゃないか！ 詩織の視線が俺に向いちまったじゃねえか！

「は？ じゃないだろ。この詩織ちゃんとやらは歯が痛くもないのに痛いと言っているんだ。これは立派なボケだろ？」

「……痛くない？」

「ああ、少なくとも俺が診る限りじゃな」

「見るって何を？」

「おい、カズ。貴様はツツコミだろう。ボケてどうする。今、彼女を診ていたじゃないか」

「いや、見るって、今で歯が痛いかわかるのか？」

「当たり前だ。俺は歯科医だ。話を聞いて、顔を診れば大体のことはわかる。それが視診だ」

「いやいやいや！ むしろ俺はそこにツツコミを入れたくなるんだが」

「先生は普通じゃないんです。治療の腕もそうですけど、特に観察力が」

そう言ったのは奈緒さんだった。そのまま奈緒さんは話を続けた。
「たぶん、先生は、詩織さんが話している言葉や口調に違和感があったことを言っているのだと思います。歯が痛いとそれを庇って口調が不自然になったりするんだそうです。先生はその微妙な違いを聞き分けたんだと思いますよ」

「加えて、奥歯がギシギシとすぐ痛むらしいんだが、そこまでなれば、自然と表面的な変化も現れる。だが、彼女にはそれが無い。均整のとれた美しい顔立ちだよ。まあ、ちよつと痛む程度であれば、ちゃんと歯を診なければわからないがな。何に動揺しているのかは知らないが、彼女の歯はいたって健康だろうよ」

俺と詩織は開いた口が塞がらなかった……

幸子がそこまで名医だとは知らなかった。普通の医者でもこのくらいわかるものなのだろうか。

「まったく……菊池の妄想には困ったものだ……彼女をどこからさらってきたんだ？ おとなしく吐けば警察には通報しないでやろう」「ちよつと待つてくださいよー！ 別に僕はさらってなんかいません

んから。彼女が外でここをじっと見ていたので、てつきり、今日が初めての患者さんかと思つて、中に連れてきてあげたんですよ」
青年が慌てたように身振り手振りで、無実を証明しようとしている。

全員の視線が詩織に集中した。詩織の顔がみるみる赤くなつていくのがわかる。

なるほど、理解した。詩織は俺の後をつけてきたんだ。

さすがに詩織の誘いを断りすぎたんだ。

それで、俺の行動を不信に思つてつけてきた。そんなところだろう。

だが、そうになると、このあとが厄介だな……

「僕の勘違いだったことは謝ります。でも、あなたはどうしても鹿野歯科の前で立っていたんですか？」

青年が聞いた。

「……つけてきたの」

「はい？」あまりの小さな声に青年が聞き返す。

「つけてきたのよ！ その和也の後をね！ 最近様子がおかしかったから心配したのよ！ で、来てみれば歯医者？ あんた歯医者大っ嫌いじゃない。それがどうしてこんなところにいるのよ！」

詩織は俺を指さしながら待合室に響き渡るような大声をあげた。

あー、やっぱりこうなつた……。

詩織は追いつめられると吹っ切れるんだ。このカウンターが厄介なんだよな。

「ん？ なんだ？ 二人は知り合いなのか？」幸子。

「そうならそうと言つてくださればよかったのに」奈緒さん。

「そういえば彼は誰なんです？ 彼も患者さんですか？」青年。

三者三様の台詞とともに、全員の視線が今度は俺に向いた。

くそっ！ どうする……

俺自身、なんで通っているか明確に答えが出せていないのに、なんて言えばいいんだ。

それに歯が痛くないって言ったら、

まるで、俺が幸子と奈緒さんに会いに来ているみたいで、すつごく恥ずかしい。

なにかないか……この場をつまく収める一発逆転のアイデアは……来い！ 俺の頭に降ってこい！

「なに黙ってるのよ、カズ。答えられないの？」詩織の視線が俺を追い詰める。

「俺は……」

「俺は？ なに？」

「俺は、ここのバイトだ！」

「は？ バイト？」詩織が目を見開く。

「そうだ！ 俺は先週ここで親知らずを抜いてもらってな。あまりに幸子……じゃなくて野村先生が名医だったんで、俺は歯医者嫌いを克服できたんだ。それで、その感謝の気持ちも込めて、ここで働かせて下さいって頼んだんだ」

「え？ そんなこと頼まれた覚えは……むしろこちらからの……」俺は奈緒さんの横やりを無視して間髪入れずに畳み掛ける。

「そしたら、一週間の研修期間を設けて、その働きで決めましょうってことになったんだ。そういえば今日で一週間ですよ！ どう

ですか？ バイトで雇ってもらえますか？」

俺は奈緒さんに強い眼差しで訴えた。そして念じる。話を合わせ
てくれと……

「ウチは構いませんけど……先生も喜ぶと思いますし」

よし！ 奈緒さんはこれで大丈夫。後は……

「おー！ やったー！ 野村先生、これからもたくさんお手伝いさせてください！」

「お、おう……なんだ、やけにテンションが高いな……」 幸子は俺の迫力に押されているみたいだ。

これで、二人がこの場で余計なことを言うのは防げるはずだ。最後にこの青年。

「なるほど、アルバイトさんでしたか！ 僕は菊池涼といいます。よろしく願いしますね、カズ君」

いきなり馴れ馴れしいが、これがこの菊池という青年の性格なのだろう。

今は気にしてもしょうがない。

三人はたぶん納得してる。バイトの件は詩織と菊池青年が帰ってから二人と話せばいい。

「というわけなんだよ、詩織。心配させて悪かったな……」

「べ、別に心配なんかしてないんだからね！ 調子にのんな！ バカッ！」

「いや、調子には乗ってないけどさ」

「まあまあ、良いじゃないですか。それより、せっかく来ていただいたんですから検査していったらどうです？」

「そうだな、せっかくだからな。よし！ 奈緒、詩織ちゃんを治療室へ案内しなさい。そして菊池は帰れ」

「えー、先生冷たいなー。あ！ わかりました！ これがいわゆる愛情の裏返しってやつですね！ ツンデレですね！」

「菊池の『わかった』はいつも見当違いの『わかった』だからな……」

菊池は幸子に背中を押されるがままに帰って行った。あの人なんだっただろ。

そして、奈緒さんは詩織をその腕力に任せて強引に連れて行く。

「ちよつと待ってください！ お金とか保険証とか」

「いいからいいから。治さなきゃいけないところがあつたら、次回からでいいからよ」

幸子が笑顔で応え、奈緒さんと詩織は待合室を出て行った。

「ふうー」俺の口からおもわずため息が漏れた。

「なーにが『ふうー』だ！ さっきまでの力ズはまるで余裕がなかったな」

「なっ！ ばれてたのか？」

「当たり前だ。伊達にこの歳で開業してるわけじゃない。ぷっ！ しかし、バイトとは驚いた。中々機転の利いたアドリブだな」

「言つなよ、恥ずかしい。こっちだって必死だったんだよ」

「週三日だ。曜日は好きに決めていい。あ、知ってると思うがウチは木曜が定休日だ」

「？ なんの話だ？」

「バイトだよ、バイト。ま、バイトのない日くらい詩織ちゃんの相手をしてやることだな。見た限り嫉妬深そうだ。俺と奈緒にとばかりがきたら敵わないからな」

「俺と詩織は幸子が考えているような関係じゃないぞ？」

「どうか……」幸子はそう言つて治療室へ消えた。

一人待合室に取り残された俺は、四人掛けのソファに落ち着く

と溜息をついた。

「さて、詩織への埋め合わせはなんにするかな……」

勘違い青年（後書き）

ここまですがプロローグです。

次回からは、一話完結の話を書いていきたいと思ってます。
短編連作って感じですね。

頑張って更新していきたいと思います。

と書きましたが、短編連作無理でした。ごめんなさい。

今日のキャラクターからの一言。

菊池「みんなが言うほど勘違いしてないと思うんですけどね」

美しい男

「暇だ……」

「どうしたんです？ カズ君。とっても暇そうですね」

俺が治療室側の椅子に座り、受付で肘をついて待合室をぼんやり眺めていると奈緒さんが話しかけてくれた。どうやら、俺にお茶を持ってきてくれたらしい。俺の手元にそつと湯呑が置かれる。

「正解ですよ、奈緒さん。これじゃ、まるで俺は必要ないじゃないですか。あ、お茶ありがとうございます」

「そんなことありませんよ。カズ君がいてくれると、その間にお買い物とか、お洗濯が出来るじゃないですか。どういたしまして」

「けど、実際誰か来たら俺じゃどうしようもないですよ。俺には処置できませんから」

「それは私も同じです」

ああ……、この笑顔。今日も生きていてよかった……って！――瞬、天国に行くところだった。

「あの……ところで幸子は何してるんですか？ 今日は見えてないですけど」

「先生ならお部屋でお休みしてますよ」

「えっ！ どこか具合でも悪いんですか？」

「いえ、ただのお昼寝です」

「……………」

「あ、私、別にボケてませんからツツコミは入れなくていいですよ？」

「……今日の患者さんはどうするんです？」

「えーっと、今日は『山田太郎』さんの予約が五時に入ってますね。それまでには起こしてきますから」

「その必要はないよ。もう起きた」

幸子が目をこすりながら俺と奈緒さんの前に登場した。

「昼寝とはいい身分だな」俺が呆れて話しかける。

「当たり前だ。俺はこの歯科医だからな。ここではすべてが俺中心なのだよ」

「そんなの俺は認めねえからな」

「ふん！ カズの意見など聞いていないわ。それより奈緒。リビングに俺のおやつが無かったがどういうことだ？」

「ああ、今日はおやつありませんよ」

「なっ！ なんだと！」

「だって、昨日、ピーマンとトマト残したじゃないですか。好き嫌いしたらおやつ抜きて約束しましたよね？」

「いやいや、残してないし！ 何処にそんな痕跡があったっていうんだ？」

「本当に痕跡がなかったと思いますか？」

奈緒さんは勝ち誇ったような笑みで幸子に問いかける。

その表情に幸子は思い当たることがあったらしい。いきなり俺をにらみつけて、

「カズ！ お前、奈緒にばらしたな！ 卑怯だぞ！」

「……俺は何も喋ってないぞ？」

「ほーら、やっぱり！ カズ君に食べてもらったんですね！ じゃあ、今日はやっぱりおやつ抜きです」

「謀ったな！ 奈緒！ くそう……こんな簡単な罠に引っかかるとは……」

幸子がガツクリと肩を落とし意気消沈している。

さっきまでの勢いはどこへ行ったのやら……これで、しっかりバランスは取れているみたいだな。

【キンコーン！】

「あのー、ちよつと早く来ちゃったんですけど大丈夫ですか？」

扉を開けたのは、小太りの眼鏡をかけたサラリーマンだった。

「おー！ 山田。いいぞ、あがれあがれ」

幸子は本当に誰に対してもこの態度だ。

文句をいう人間がいらないのがおかしい。いや、文句をいうやつは来なくなるだけか……。

「邪魔します」

山田さんは礼儀正しく靴を揃えたとよそよそしく受付までやってきて保険証を提示してくれた。

見るからにおとなしそうで、優しそうで、人のよさそうな人というのが最初の印象だ。保険証には、

山田太郎 四五歳 と書いてある。

歳よりは若く見えるんだな。ここに来る患者にしてはいたって普通だ。普通すぎると言ってもいいぐらいだ。

たった一つを除いて……

「えーつと、今日は虫歯の治療でしたね」奈緒さんがカルテを見ながら確認する。

「はい…… よろしく願います」

「あの、ちよつといいですか？」

俺は問題の答えが難しくてあっているかどうかわからないけど、あつていたら勇者だよなあ、けど間違えたら赤っ恥だ。とか考えて恐る恐る手を上げる数学の授業風景を浮かべながら質問してみた。

「どうした？ カズ」

「山田さん、それ地声ですか？」

一瞬ビクリとした山田さんは、それでもその質問にはもう慣れましたといった感じで、

小さく「はい……」とそれを認めた。

「ああ、そつか、カズは山田に会うのは初めてか。そりゃ無理もないな」

「山田さんの声ってとっても素敵ですもんね。私、山田さんのファ

ンなんです」

奈緒さんは両手を頬にあててニヤニヤとそして少しばかり照れている様子もある。

もう、くどいほど言っているかもしれないが、やっぱり美しいものは何度でも美しいと愛でたくなる気持ちが今の俺にもようやく理解できたようだ。

「ファンて声のですか？」

「はい、山田さんは歌がお上手なんですよ！ この声で歌われたらもう……て感じです」

「はあ……そうなんですか」

「カズはどうやら山田の実力を見誤っているようだ……見かけで他人を判断する悪い例だ」

幸子は残念なものでも見るような目で俺を一瞥する。

「なっ！ 別に俺はそんなつもりじゃ……」

「まあいい。普通は皆そういう態度になる。俺もそうだった」

「てめえ！ 自分を棚に上げてよくさつきみたいなのが言えたもんだな」

「山田、軽く歌ってみてくれないか？ 軽くでもいい。カズに本気を出したらもつたないからな」

「俺の発言は無視かよ！ あともつたないってなんだ！ 別に減らないだろ！」

「わかりました」そして山田さんも俺を無視して静かに歌いだした。

「こ、これは……」

普段、歌を聴かないからかもしれないが、山田さんの歌うそれは俺の想像を遥かに凌ぐものだった。

ラララーと歌詞のない旋律が心地よく俺の耳から体中を駆け巡り、まるでアルプスの雪どけ水が静かに山肌を浸透していくように俺の血となり骨となる。そんなイメージだ。まさか歌で情景をイメージすることができるなどとは夢にも思わなかったことだ。

「すごい……」本当にすごいものはすごいとしか形容できないということを今の俺はようやく理解できるようになった。

奈緒さんはさっきの二割増しでうっとりしている。

「ありがとうございます」

山田太郎 四五歳 は、高校生に対して照れくさそうに深々とお辞儀をする。

とても好感のもてる素敵な人なんだと思った。

「どうだ、まいったか！」

「てめえが威張んじゃねえ」

胸を張る幸子の頭にポンツと手を置いた。さすがに思い切りどつくわけにはいかないからな。

すると、顔を上げた山田さんが俺たちの方を見て何か言いたげな顔をしていた。

言うべきかわざるべきか…… クラスメイトのズボンのチャックが開いているのを目撃したけどどうしようかな、と迷っている感じに近い表情だ。俺は一応確認したがしつかりと閉じていた。そもそも山田さんの位置からじゃ、受付が邪魔をして見えないはずだ。

じゃあ、いったい何を打ち明けようとしているのか……

「どうかされましたか？」俺はたまりかねて声をかけた。

「実は折り入ってご相談があるんです……」

「相談？ なんだ、言ってみろ」

「実は…… 仕事場に好きな人がいるんですが、なかなか声をかけられなくて……」

なななっ！ なんだってー！ ここにきて恋愛相談キター。ここは俺の記憶が正しければ、歯医者のはずなんだが…… と、俺の心の中の驚きなど知りもせず、幸子は、

「ほお…… それで、どうやってらお近づきになれるかと…… そういうことか？」

「はい…… 私はこの歳まで女性とお付き合いしたことがなく、女性との接し方がイマイチよくわからないのです。こんな見た目ですし

……」

「私たちとは話せているじゃないか」

「幸子は女性っていうよりは、こど——ゴフツ！」

幸子の右ストレートが俺のレバーにクリーンヒット。さすが幸子いいものを持っていやがる……

「お二人の場合は、その……お二人の方から話しかけていただけるので……私からはなかなか……」

確かに今だって俺が助け船を出さなきゃ話しずらそうだったもんな。

てか、ちゃんと幸子を女性とカウントしているあたり、山田さんはやっぱり良い人だ。やべっ！

なんか急に目頭が熱くなってきた。俺が目頭を押さえているのを目撃した幸子が溜息をつくと、

「カズ。お前なんかいいアイデアはないのか？ 貴様も男だろう」

「んなこと言われても俺だって、付き合ったことない歴〃年齢の人間だぜ？ しかも大人の恋愛にアドバイスなんかできるかよ」

「ふん！ 使えん男だな。貴様は」さすがにちよつとイラッとした俺は、

「……なんかきつかけでもあれば良いんですけどね。会社で飲み会とかないんですか？ こうお酒の勢いでガーっといけないですかね」

「ガーってなんだよ、アホ」いちいち幸子が突っかかってくるのはもう無視しよう。

「飲み会があります……明日。でも……私、お酒が飲めないんです」

「あ、飲み会はあるんですか？ だったら二次会でカラオケに行きましょう！ その女性に山田さんの歌を聴かせてあげればいいんですよ」

「わあ！ それは名案ですね！」奈緒さんが胸の前で両手をパチンと合わせた。

「確かに名案だな。山田の取り柄を最大限生かせる場を作るのはいいことだ」

「今まで、会社でカラオケに行ったことはあるんですか？」

「二次会はいつもカラオケらしいんですが、いつも勇気が出なくて一次会で帰ってしまうんです……」

「それはもったいないですね。でも、ということは、皆さん山田さんの歌の凄さを知らないんですね？ かえってインパクトあっていいかもしれないですね」

「ただ……一つ問題が……」

「なんですか？」

「歌を知らないんです。カラオケに入っているようなものは何も……」

「……………」 狭い部屋が隙間なく沈黙で埋め尽くされた。

「どうしましょう……」 山田さんが苦笑まじりに言う

「そんなの決まっているだろう」と幸子が断言する。

「なにが？」 俺が聞く。

「特訓するんだよ」

特訓すると言った幸子は、まず、虫歯を治すと言って奈緒さんと処置を始めた。

その間、俺はネットで相手の30代女性が好むであろう曲を検索し、

急いで駅前のレンタルショップにCDを借りに奔走する。

さすがに歌の実力は相当なもので、一度聴いただけで山田さんはその歌を自分のものにしていく。

特訓と言ってもさほど時間はかからなかった。

そして、あれから1ヶ月。

今日は山田さんが定期健診の予約を入れている。

俺は自分のことのようにドキドキしていた。幸子も奈緒さんも見たところどうやら同じ心境らしい。

幸子にいたっては、例の鹿の頭をかぶって待合室をぐるぐる回っている。

「鹿は関係ないと思うがな」

「うるさい！ これかぶってると落ち着くんだよ！ カズもかぶってみるか？」

「俺は遠慮しておくよ……」

10分後。 扉が開く。

「あのー、ちょっと早く来ちゃったんですけど大丈夫ですか？ て、うわっ！ 鹿がいる！」

もちろん山田さんだった。幸子の鹿に期待を裏切らない驚きを見せてくれる。

「おお、おお！ ささっ！ ここに座りなさい」

鹿が自分の隣に座れと、四人掛けの淡い水色のソファーをバンバンと叩く。

「それじゃ、失礼して……」山田さんはそういつてソファーに腰かける。

「それで……どうなりましたか？」

本当だったらこんな野次馬のようなことはしたくないのだが、俺はもう聞かずにはいられなくなっていた。

「……駄目でした」山田さんは残念そうに、けど、どこか安心したように一言口にした。

「駄目って……もしかしてカラオケ行きませんでした？」

「行きました」

「じゃあ、歌わなかったんですか？」奈緒さんが不思議そうに尋ねた。

「歌いました」

「じゃあ、何が駄目だったんだ？」今度は鹿だ。

「当日はうまくいきました。そりゃあもう、大成功と言っていいくらいです。彼女とも自然に話すこともできました。私からは声をかけられませんでしたけど……」

「おお！　すごいじゃないですか。——え、でも駄目って……何が駄目なんですか？」

山田さんは小さないたずらが見つかった少年のように恥ずかしそうに小さく笑って、

「そのカラオケで次の休日に二人で会う約束をしたんです」

「「「え？」」」　かなりの進展に3人で驚いたが、鹿の表情はわからない。

「それでその休日に結局何処へ行っていていいかわからないので、またカラオケに行ったんです」

「その選択は間違っていないんじゃないか？　下手に冒険するよりは自分の得意なもので攻めた方がいい」

「はい。彼女も最初はノリノリで。交互に歌いあつたんですけど、二人だとペースが速くて、あつという間に私のレパートリーが尽きてしまつて……」

「それでどうしたんだ？」鹿が聞く。

「違う歌に挑戦したんです……そしたら『ある歌』で彼女の様子が急変して……気づいたら号泣してたんです……」

私はそういう場に立ち会ったことが無くて……どうしていいかわからない間に時間が来て、結局、そこから別れ際の挨拶まで一言も喋れなくて……」

「……いったい何を歌ったんですか？」

俺が聞いた。だって、CDを借りてきたのは俺だ。もしかしたら俺に非があるかもしれない。

「『三月の雪、あの日、君がくれた星空の永遠』です」

「……それって恐ろしいほど悲しいバラードですよ。すごく売れたってネットで見ましたけど、俺そんなの借りてきましたっけ？」

盛り上がりがないと思ってやめたんですけど」

「いえ、これは工藤さんの選曲じゃありません。さっきも言ったように教えていただいた歌は全部歌ってしまつて、それで入れた曲の一つなんです。——実は、私が二次会でカラオケに行つてから、会社の皆さんが声をかけてくれるようになって、仕事終わりに会社の仲間とカラオケに行くようになったんです。その時に同僚がこの歌を歌っていて良い歌だなつて。タイトルを覚えていたんです。まさか、こんなことになるとは思いませんでした……」

「けど、あまり悲しそうには見えないな」鹿が言った。

「まあ、もう三週間も前の話ですし……それにカラオケがきっかけで会社の仲間とも仲良くなれたのは凄く嬉しいんです。この歳であれですけど、今、仕事も私生活も人生で一番充実しているんですよ。お酒だつて少しですけど飲めるようになったんですよ？」

山田さんは俺たちに今まで見せたことのない笑顔で得意げにそう語つた。

ま、奈緒さんの笑顔には敵わないけどな。

「そうか、ならばいい。ではそろそろ健診を始めようか」

鹿がゆつくりと立ち上がると、そのまま治療室のドアを開けて中へ入っていく。奈緒さんと山田さんも後に続いた。

「幸子、あのまま仕事するつもりか？」

美しい男（後書き）

こうやって書いていると、ホントにプロの作家さんは凄いなと思います。話が思い浮かばない（笑）

今日のキャラクターからの一言。

山田「山田です。これからもよろしくお願いします」

休診日

「なあ、幸子。今日休みだよな。」

どうして俺は待合室のソファーでお前と向き合っていないきゃならないんだ？」

「……実は、深刻な問題が発生した」

「……深刻？ そんな真剣な顔して……一体何があったんだよ」

「実は……作者がネタに尽きたらしい……」

「なっ！ 早すぎだろ！ ってか、そういうメタ発言はありなのかな？」

「仕方がないんだ……調子に乗って連載なんか書いたりするからこうなった。」

ちゃんとプロットをつくって、計画的に書くべきだったんだ……」

「おい、それ作者の意見を代弁してるだろ。作品使って言い訳すんじゃないよ」

「けど、カズの好きな週刊少年『跳ねる』もメタ的な発言をしている作品あるじゃないか。」

『シルバーボール』とか『お助け踊り』とか」

「幸子でめえ……やっていいことと悪いことがあるだろ。さすがにごまかせてないぞ」

「問題ない。この作品は営利目的で書かれた作品じゃないからな。」

この程度なら集英社さんも笑って許してくれるはずだ」

「どさくさにまぎれて、出版社の名前出しやがった！」

「そつえば、このサイトでランキング1位の『魔法科高校の劣等生』」

あれ、めちゃくちゃ面白いな！」

「今度はサイト内キター！ なんで大人気作品の宣伝なんかしてるだよ」

「いや、だって同じサイトだからいいかなって。別にここに書かな

くてもすでに人気あるし」

「だったらわざわざ言う必要ねえだろ！」

「だって……」

「だって？」

「ネタが無いんだもん」

「結局そこよ！」

「やっぱり前回は2話に分けるべきだったと思うんだ。あれは連載にするには長過ぎた」

「たしかにな……結構文字数あったよな。けど作者は一話完結目指してんだろ？」

「だから意地になってたんじゃねえか？」

「その意地の所為で結局自分の首を絞めているのだ……馬鹿な男よの……」

「まあ……それくらいで許してやろうぜ」

「そうだな……こうしている今も次の話を考えているに違いない。きっと幸子大先生の可愛さや、優秀さがにじみ出る作品になるだろう」

「それってなかなかハードルがたかっ——ゴフッ！」

「なにか言ったか？」

「いや、なんでもない……（さすが幸子。いい右ストレートだ……）」

「

「それじゃ！ 読者のみんな！ 診療日に俺と握手！」

「いや、戦隊ヒーローショーじゃねえから！」

休診日（後書き）

次回は八月二日更新の予定です。
頑張ります。

今日のキャラクターからの一言。

奈緒「私の出番が少ないと思うのは気のせいですか？」

帰国子女

「そうだ！ プールへ行こう！」

「京都にでも行きそうなノリでいきなり何を言い出すんだお前は。って、いきなりなんて格好で登場するんだお前は」

いつも通り受付でのんびりしていると幸子が、

学校指定の紺のスクール水着にカラフルな浮き輪を腰に装着して二階から降りてきた。

「カズ！ プールへ行こう。大事なことから二回言ってみた」

「断る」俺は幸子の水着に見向きもせず、本日の予約に目を通す。

ここに患者の名前があれば、断る真つ当な理由になるのだが、残念なことに今日は予約がゼロだ。

いったいこの歯医者はどうやって生計を立てているんだと不思議に思う。

「なぜだ！ たった今大事なことだと言っただろう」

「どうして俺がガキのプールに付き添わなきゃならんのだ」

「……今なら奈緒の水着姿もセットだぞ」

「……なん……だと？」

宙を仰ぐ。

真珠のように艶やかな美しく白い肌と曲線美。

水着は黒のビキニー択だろう。

「マヌケ面」

「あ？」幸子の罵倒に我に返る。

「今のお前の面ことだ。鏡を見てみる。じゃなくて、とにかくプールへ行くのだ」

その場で駄々をこね飛び跳ねる幸子は一二歳という実年齢よりも幼く見えた。

患者を前にすると大人以上に大人びている幸子だが、

こうしていると小学六年生なんだと今さらながら理解する。

「なんでそんなにプールへ行きたがるんだよ」

「ギクッ！」

「あ、幸子、今ギクッとしたろ。もしかして泳げないのか？」

「ギクギクッ！」

「はっ！ 図星かよ！ 天下の幸子先生がまさかカナヅチとはねえ……」

俺がニヤニヤしながら上から見下ろしてやると、

「なーおー！ カズがいじめるー」

幸子のわざとらしい悲痛な叫びを聞きつけて奈緒さんが待合室にやってきた。

「あらあら、カズ君、駄目じゃないですか。あんまりいじめちゃだめですよ？」

先生は見た目通りの一二歳なんですから」

「見た目通りとかいうな！ 悲しくなるだろ……」

「ああ、先生ごめんなさい」

「そんなことよりも奈緒もプール行きたいだろ？ 一緒にいこーよ」

奈緒さんは右手を頬にあて、少し考え込むと、

「閃いたっ！」と言わんばかりに目を見開いて両手を叩く。

「んー、でも、お洗濯とか夕飯の準備もありますし……」

そっだ！ カズ君に連れて行ってもらえばいいじゃないですか」

「奈緒さんまで！ 嫌ですよ。めんどくさいじゃないですか！」

「まあまあ、そんなこと言わないで——」

【キンコーン！】

「お！ ほら患者さんだ！ 幸子、仕事だぞ」

だが、現れたのは患者ではなく、勘違いの激しいあの男だった。

「こんにちはー。って、先生その格好は何ですか！

あ！ わかりましたよ。鹿野歯科の新しいサービスですね！

けど、この場合は奈緒さんとカズ君の格好はそのままなんですか？」

幸子は自分の今の姿を思い出し、急いで奈緒さんの背後に周り身を隠した。

まったく、相変わらずの勘違い野郎だ。

だいたい、奈緒さんが水着を着るのは良いとして、俺まで恰好を変える意味がわからん。

「菊池。貴様はどこまでバカな勘違いをすれば気が済むんだ。そんな歯医者があるわけないだろう」

「そうですよ。菊池さん。それに私達が水着になったところで、なんのサービスにもならないじゃないですか」

と奈緒さん。この人は天然というかなんとというか……

「それで今日は何の御用ですか？ 健康な菊池さん」俺が言う。

「いやー、実はフランスから従姉夫婦が遊びに来てましてね。ほら

ミシエル。挨拶できるだろ？」

そついうと扉の陰からこれまた金髪の美少女が現れた。

「これが本物か……」

ぼそりと出てしまった俺の言葉に幸子が反応し、

「それはどういう意味だ？ 私は悔しいが普通の日本人だ。

本場フランス美少女と比べられても困るのだよ」

と言わせてしまうほどに、ミシエルという少女は可憐で美しい少女である。

水色の水玉ワンピースが非常に似合っている。

フランス人形とはよく言ったものだ。

全てのフランス人の少女がここまで美しいなら、移住を考えなければならぬかもしれない。

すまん。言いすぎた。

「ミシエルデス。コンニチハ」ペコリと可愛らしくお辞儀をする。

「はい。こんにちは。私は奈緒よ。よろしくね。」

ミシエルの前かがんで挨拶をする奈緒さん。美しい。

「日本語うまいな。俺は幸子だ。よろしくな」

「あ、俺は工藤和也。和也でいいよ。よろしく」

「ミシエルはお父さんがフランス人のハーフでしてね。

母親から日本語を教えてもらっているから日常会話程度なら普通に日本語も喋れるんですよ。」

年に二、三回は日本に遊びに来ていますし」

菊池青年が補足する。つまりは二人には血の繋がりがあるわけだが……

人間とは実に神秘的な生き物であると痛感させられる。

「それで？ そのミシエルちゃんの歯の具合でも悪いんですか？」

「いやいや、違うんだよ、カズ君。ミシエルはこっちに友達がいないだろ？」

僕はこの年代の子の知り合いなんていないからさ。ふと、このことを思いだしてね。

ここには一人いたなと」

「菊池。今はバリバリ営業中なんだが？」

「おいおい。さっきまでプールに行こうって言ってたやつ台詞かよ」

「なっ！ それとこれとは話が別だ」

「どう別なんだよ？ そうだ！一緒にプールへ行ってくればいいじゃないか」

「プールですか？ ああ、それでそういう格好をしているんですね」

菊池青年はようやく納得したように右手の平に拳をポンとのせた。

「そういうことです。というわけで、菊池さん。」

幸子も一緒にプールへ連れて行ってもらえませんか？」

よし！これで俺はめんどごとから解放される！

「いやー、それが今日は急遽、大学に行かなくちゃなくなりましたね。」

それでみなさんの所に来たんですよ。でもよかった。

プールに行くというならミシエルも連れて行ってもらえませんか

？」

どうしてそーなったーーーー！

まさかのカウンターパンチだ。

まで、やめてくれ！

ミシエルちゃん、そんなに胸をときめかせて、キラキラした瞳で俺を見るんじゃない！

あ、こら！ 幸子も便乗するな！ おもしろがって奈緒さんまで

……

三人の美女・美少女に見つめられた俺はKOされるのにさほど時間はいらなかった。

「わかりましたよ……行けばいいんですね」

「そうだ。ついでに詩織ちゃんも呼んだらどうだ？」

「どうしてあいつがでてくんだよ」

「彼女がいれば面倒が少しは減るかもしれないぞ？」

確かに、詩織はめんどろみがいいからな……

「わかった……連絡はしてみるよ」

「よし！ そうとなれば決まりだ！ 全員支度をしたのち一五分後にここに集合だ！ かいさーん！」

幸子が右手を上げて合図をするとみな支度をしに待合室を離れる。いつもながら部屋には俺が一人取り残された。

「水着どこやったかな……」

帰国子女（後書き）

続きます。多分。

よろしく願います。

次回はミシエルちゃんの意外な事実が明らかになったり、
ならなかったり……

今日のキャラクターからの一言。

ミシエル「クスクスッ！ プール楽シミデス」

帰国子女2（前書き）

前回のあらすじ。

なんやかんや京都に行くノリで、
プールへ行くことになりましたとき。

帰国子女2

というわけで、プールである。

鹿野齒科医院から徒歩一五分のところにある市営プール。

普段はおじいちゃんおばあちゃんて賑わうが、土曜の午後ともなれば家族での来客も多い。

そんな中、俺は詩織と幸子、そしてミシェルというフランス人のハーフの少女を連れてやってきた。

いったいどんな組み合わせだと自分でわからなくなる。

「勘違いしないでよね！ あんたに誘われたからとかじゃなくて、ちようど暑かったからプールで泳ぎたいと思ってただけなんだから」とか詩織はぶつぶつ言っているし、それならなんで集合に三〇分も遅れたんだとか、

水着が泳ぐのに全然適さない白のビキニなんだとか、そういうところではツッコまないでおく。

ツッコめばとび膝蹴りは覚悟しなければならない。

「さてと、幸子は泳げるようになりたいんだっとな。よし、俺が教えてやるからこっち来い」

「お！ わかった」

言われるがまま、幸子はスクール水着に浮き輪を装着してついて来るが、

俺に教える気はさらさらない。適当になんだかんだ指導している
と、

「もう！ そんなんじゃないやダメよ！ あんた教える気あんの？」

と詩織が横からおせっかいをやく。

作戦通り。

詩織は正面から頼んでもやってくれないから、こつやって自分から言い出す環境を作ってやればいいのだ。そうすれば、持ち前の面倒見の良さでいろいろとやってくれる。

正直、俺が教えるより詩織が教えた方が数倍早く泳ぎをマスターできるだろう。

もしかしたらそこまで見越して、幸子は詩織を呼べと言ったんじゃないか。

そう考えると幸子はやはりただもんじやない。

俺がプールサイドで腰を下ろし、周りに目をやると、所々で視線が詩織に向いているのに気付いた。

まあ、市営プールにはもったいないルックスであることは認めよう。

茶色がかったツインテールも似合っているし、

胸だって大きくはないが、バランスのとれた抜群のスタイルも幼馴染である俺が保証する。

そして俺はプールにいる幸子と詩織のコンビをぼんやりと眺めた。幸子はただいまプールサイドに両手についてバタ足の練習中である。

「ネエネエ」

いつの間にか隣にいたミシェルが肩をつんつんしてくる。

水着はさっき買ったばかりのピンクのワンピースに水玉模様を施したものだ。

水玉模様が好きみたいだな。

「ん？ どうした？」

「アレハナニ？」

ミシエルの目線と指の先では、若いカップルが互いの髪を撫であい、イチヤつく光景が繰り広げられていた。

あいつら、市営プールでなにをやってるんだ！ そんなもんを見せるんじゃない！

日本人がすべてそういう風だと思われるじゃないか！

俺はフランス少女ミシエルにどう説明しようか、必死に悩み、自

分の精一杯の言葉で対処する。

「あ、あれは、あ、愛しあっているんじゃないかな。俺にはよくわからないけど」

「愛シアウツテナニ？ 具体的ニドウイウコト？」

「ぐ、具体的だと？」

「なんだ、なんだなんだ？ 俺は何て答えればいい？」

歳は聞いてないが、幸子とさして変わらぬ年齢の少女に男女が愛し合うことについて具体的に何と答えればいい？

目の前では先ほどの男女が徐々にエスカレートし、キスをしだした。

いい加減やめてくれ。俺に答えられることなんて程度がしれているんだから。

「クスッ！ クドーハカワイイナ。コンナコトデ、ドギマギスルナ。ンテ。ヤッパリ日本ノ男ハピュアダナ」

ミシエルが横でクスクスと笑いだした。

え？ どゆこと？

俺って試されてたの？ フランス少女ミシエルに？

「ネエネエ、クドー。ジャアアレハナンダ？」

次にミシエルが指さした先には、

何か訳ありなんじゃないかと思う五〇過ぎの中年男性と二〇代と見える女性のカップルだった。

俺は今回に関しては毅然とした態度で答えることができた。

「んー、あれは親子かなんかじゃないかな。家族の仲が良いのは良いことだな」

「クスクス！ アレハドウミテモ訳アリダ。二人ニハ、ドンナストーリーガアルノカ、妄想ヲ膨ラマスノガ、楽シイナ」

「……」

「ン？ クドー、ドウシタ？」

「いやいや、どうしたもこうしたも、最近のガキはみんなこういうのか？」

幸子もミシエルもなんでこんなにませてるんだ？

なんか逆にこっちが恥ずかしくなってくる。

「サテト、ワタシモ泳イデクル。クドーモ一緒ニ行コウヨ」

「俺はここに居たいんだが」

一瞬の間。

ミシエルは俯いて話し出す。

「奈緒ハ、クドーガ遊ンデクレタツテ聞イタラ喜ブダロウケドナ。
ケド、遊ンデクレナカッタツテ聞イタラ悲シムダロウナ……」

「……ミシエルちゃんは何が言いたいのかな？」

「涼カラ聞イタケド、奈緒ノ右手ハ凄インダツテ」

「……」

未恐ろしい。

という言葉はこういう時に使うのだろう。

目の前にいるフランス育ちのフランス美少女は、

俺の周りの数少ない情報から最適な物を選び、俺を脅している。

私のいうことを聞かなかつたら奈緒さんの鉄拳制裁が待っている

と、暗にほめかしているわけだ。

涼というのは菊池青年の名前だったはずだ。あの野郎、余計なことを……

この少女は敵に回すと厄介だと、俺の直観が告げていた……

そして、夕方。

鹿野歯科に戻ると菊池青年と奈緒さんが出迎えてくれた。

この二人がお似合いのカップルに見えなくもないのが、少しむかつく。

無論、むかついているのは菊池青年に対してだが、そんなこともお構いなしにさわやかに話しかけてくる。

「いやー、今日はお世話になりました。カズ君ありがとうね」

「いえ、……俺も楽しかったですよ。ね？ ミシエルちゃん？」

「ウン……楽シカッタ」

ミシエルの様子を察した菊池青年が俺に耳打ちする。

「驚きました。たった一日でミシエルを手懐けるなんて、いったいどうやったんですか？」

「まあ、『色々』ありまして。って、その台詞は、やっぱりミシエルの性格をわかった上で、俺にミシエルを預けたんですね？」

菊池青年は小さく笑う。

「いやー、僕にはミシエルは荷が重すぎましてね。本当に頼んでよかったですよ」

「……大学に行くっていうのは？」

「もちろん行きましたよ？ まあ、絶対に行かなきゃならないってわけじゃなかったんですがね。僕もプール行きたかったなー。あっはっはっは」

「笑えねえよ、こら」

そこまで言いかけて、俺のズボンをグイグイ引っ張りながら俺を見上げるミシエルに気付いた。

「どうしたんだ？」

「……マタ、一緒ニ遊ンデクレル？」

俺の問いかけにミシエルは顔を真っ赤にしながら甘えるように問いかけて返してきた。

「ああ、また遊ぼうな」

笑顔なんて得意じゃないが、出来る限りの笑顔で俺はそう答える。するとミシエルも笑顔になった。

「では、僕たちはこれで失礼します。今日は本当にありがとうございました」

「アリガトウゴザイマシタ」

二人は並んで軽くお辞儀をすると鹿野歯科を後にした。

「驚いたな。カズに子供に好かれる才能があつたとは知らなかったよ」

「えっ！ 先生何を言ってるんですか？ カズ君は子供受けが良いんですよ？ 患者さんのお子さんたちともうまくやってますし、何より先生とのやり取りで最初から確信してましたし」

「俺を子供の中にいれるな！」

「だって、先生子供じゃないですか」

「ぬう……」

どうやら、奈緒さんの笑顔に言いくるめられてしまったらしい。

まあ、そんなことはどうでもいいんだが、それよりも俺は背中にさつきから突き刺さる殺気の対処に困っていた。

「なあ、詩織は何をそんなに怒っているんだ？」

「別に……」

別に、じゃねえだろ。めちやくちゃ不機嫌なんだけど……

でも、それを言ったらとび膝蹴りが……

「カズ。今日はもう帰っていいぞ。詩織ちゃんも今日は泳ぎを教えなくてありがとう！ お蔭でとっても助かったよ」

「ううん、私はたいしたことはしてないわ。幸子先生が頑張ったからよ」

と微笑みかける詩織。

どうして俺にはこの笑顔を向けてくれないんだろうな。

などと考えても仕方がないので、時間も時間だし俺は早々に挨拶をして帰ることに決めた。

「じゃ、帰るわ。お疲れ様です」

「「お疲れ様」」

歯科を出ると詩織が不吉なことを言い出した。

「ちよっと、この後付き合いなさい」

「何処へ？」

「駅前のジムの屋内プールよ。私、全然泳いでないんだもん」

「一人で行けよ。今日は疲れてるんだ……」

すると、後ろで何かプツンと切れた音がした。

今更遅いが、迂闊だった思う。

「はあ！？ 元はと言えばあんたが誘ったからでしょ？ 自分の仕事他人に押し付けて遊んでたくせによくそんなことが言えるわね！」

「す、すまん！ そんな怒るなって！ なっ、ちよっつ！」

ドカツ！

「……ほら、なにやってるの？ いつまでも寝てないで、さっさと行くわよ！」

道路に倒れる俺。

背を向けて駅へと向かう詩織。

「さすが詩織。良い蹴りだ……」

帰国子女2（後書き）

前回の最後。さすがにおかしいと思って直しました。

改訂前に読まれた方はちょっとだけ戻ってみてください。

まあ、ストーリー上問題はないんですが。

今日のキャラクターからの一言。

詩織「べ、別に感想なんて期待してないんだからね！」

休診日2

「今日のお相手は奈緒さんですか？」

「ええ、そうみたいです」

「こんなに休診日をメインのネタの間に挟んで良いんですね？」

「さあ、私に聞かれても困っちゃいます」

「それもそうですね。で、今日はどうしたんですか？」

「読者の皆さんからクレームがきているので、それを読もうと思っています」

「読者からのクレーム？ こんなに読者が少ないのにですか？」

「はい。約九割がクレームのお便りです。残りの一割は私へのファンレターみたいです」

「ほぼ全部じゃん！ 読者だけツンデレだよ！ てか地味に自慢ですか？」

「あ、ちなみに先生には内緒ですよ？ 私にばかりファンレターがきていることがわかったら拗ねちゃって、鹿野歯科の営業が成り立たなくなりますから」

「めんどくさっ！ 営業停止の理由が嫌すぎるわ！」

「それじゃあ、まず、一通目です。ペンネーム『主人公はツツコミなのに、最近全然ツツコンでないけど、ちゃんと仕事しろ』さんからです」

「ちよつと待った！」

「なんですか？ カズ君」

「それ、もはやクレームですよ？ しかも俺限定の」

「違いますよ。これはペンネームです。最後まで静かに聞いてくださいね？ —— えーっと、内容は、『主人公はツツコミを幸子先生に気に入られたはずなのに、最近、全くと言っていいほどツツコミの仕事をしていないのですが、これでいいのですか？ ちゃんと仕事しろ！ 馬鹿野郎！』だそうです」

「ペンネームと完全に一致じゃねえか！ 詳しく書いてただけかよ！
『大事なことから二回言いました』みたいな感じが！」

「というわけで、カズ君はちゃんと仕事してくださいね？ では、
次を読みます」

「俺の発言は無視ですか！」

「ペンネーム『ツインテール萌え』さんからです。——『詩織のキ
ヤラがツンツンし過ぎて笑えない。もう少しデレさせないとキャラ
の魅力が死んでしまう』というご意見です」

「まっとうな意見キター！ いや、確かに俺へのクレームもその通
りだったけど、今回も割とガチなクレームじゃねえか！」

「は？ 何言ってるんですか？ 当たり前じゃないですか！ お便
りくれてるんですよ？ ガチに決まってるじゃないですか。読者舐
めてるんですか？」

「え、あ、ごめんなさい……（なにこれ、めちやくちゃツツコミし
にくいんだけど！）」

「では、今日最後のお便りです。カズ君。心して聞くように」

「はい……わかりました」

「ペンネーム『黄金の右』さんからのお便りです」

「おっ！ 今度は割と普通のペンネームだな」

「『奈緒さんの登場回数が少ないと思うので、もっと増やしてくだ
さい』だそうです」

「そうですか？ 結構出てますよね？ 奈緒さん主要キャラですし」

「そんなことないですよ！ カズ君や先生に比べたら台詞なんか凄
く少ないですし。小説はアニメと違ってそこに居ても台詞や描写が
ないと消えちゃうんですよ？ 前回の話だって、ほとんど台詞も描
写もなくて……」

「……そのお便り、ちょっと見せてもらえませんか？」

「え？ あ、どうぞ」

「……………」

「カズ君、どうしたんですか？」

「……これ、奈緒さんの字ですよね？ 予約ノートの字と字体が一緒なんですけど」

「え？ そそそ、そんなこと、あああ、あるわけないじゃないですか」

「図星か！ 反応が露骨すぎだよ！ 奈緒さん正直すぎるわ！ てか自演は駄目でしょ！」

「だってだって、しょうがないじゃないですか……私は幼女でもないし、ツンデレでもないし、ツツコミも出来ない。キャラが薄いんです……私にあるのはこの右手と美貌だけ……炊事洗濯もできるのに……」

「なんか、最後つつすら自慢になってるんですけど……」

「とにかく出番が欲しいんです。せめてあと少しだけ……ねえ……良いでしょ？」

「いや、ちょ、え？ そんな言い寄られても困りますって！ うわ！ 胸の谷間を強引に見せようとするのは反則です！ 俺にそんな決定権はありませんから！」

「けど、カズ君いちおう主人公じゃないですか」

「いちおうかよ！」

「よし決めた！ 私にあるのはこの右手だけ。だから、力でねじ伏せることにします」

「いやいやいや、勘弁してください！」

「次回からは私が主人公です」

「ギャー！」

休診日2（後書き）

休診日は書いてて本当に楽です。
サクサク書けます。

今日のキャラクターからの一言

カズ「今回は主人公怪我のためお休みします」

鹿野奈緒（前書き）

いきなり過去編突入。

それは二人の出会いの話。

なーんてね！

鹿野奈緒

三年前。 鹿野奈緒 一六歳。

当時、喫茶店でアルバイトをしていた彼女は帰宅して、いつものようにテレビをつける。

流行の芸人やアイドルの参加する大型クイズ番組。今は特番の季節だった。

司会が問題を読み上げようとしたとき、

突然、ニュースに切り替わる。

たまにある臨時ニュースの類だと奈緒はすぐに理解した。

当事者たちでなければ、このタイミングで切り替わることに苛立ちを覚えた者もいたかもしれない。

「臨時ニュースです。先ほど、午後六時一五分頃、ケネディ国際空港発成田空港着BAN364便がエンジントラブルを起こし、太平洋沖に墜落したとの情報が入ってきました。現在、自衛隊を含む救助隊が編成され、直ちに現地へ急行するとのことです。成田空港着という事で、大勢の日本人客が搭乗していたとの情報も入っており、乗客の安否が心配されます」

「……え？」

奈緒は携帯を手に取ると両親から届いた受信メールを探す。

『今日の六時半に成田空港に着く予定だから、そっちには八時くらいかしらね。ご飯作っておいてくれるとうれしいなー。なーんてね！』

「……うそよ」

テレビでは乗客の名簿が一覧で掲載された。その中によく知る二人の名前を見つける。

プルルルル！ プルルルル！

普段、殆ど鳴ることのない自宅の電話が鳴りだした。

奈緒は、ゆつくりと近づき、受話器を取る。

「警察です。鹿野正道様と鹿野洋子様のご自宅で間違いないでしょうか」

「……………はい」

「実は、お二人の乗っていた航空機が事故にあいまして……………」

「……………テレビで見ました」

「詳しい事情のお話もありますので、一度、警察の方へお越しただけでないでしょうか」

それから先のことはあまり覚えてない。

警察の話も、

親族だけで済ませた葬式のこと、

全てが他人事のように思えた。

自分の身に起きたことだと自覚しなくなかったのかもしれない。

遺体は見つかっていない。

だから、いつか帰ってくるんじゃないかと思ったりする。

でも、心の中で大人の私がそんなことあるわけがないとたしなめた。

お母さんとお父さんは結婚二〇周年の旅行にニューヨークを選んだ。

二人の出会った街があつたらしい。

私はその場所を知らない。

いつかは一緒に行こうと話していたけど、それも叶わなくなってしまった。

私の家は『鹿野歯科医院』という街の小さな歯医者さんだ。

地元の患者さんも結構いて、経営は順調だったみたい。

この前、家ごとリフォームをして一階部分の医院も改装した。

まだ、きれいな器具や処置台は戻ることのない主を今も待ち続けているのかもしれない。

私は待合室のソファに腰かけるとその真新しいソファを優しく撫でた。

「もう、ここに患者さんが座ることもないのかな……」

かつての賑わいが私の脳裏に蘇ると自然と涙があふれ、止まらなくなつた。

止めるつもりもなかった……

ゴンゴン！ ゴンゴン！

誰かが扉を叩いている。

歯科医のいない歯科がやっているわけもなく、当然、扉には鍵が掛かっている。

ゴンゴン！ ゴンゴン！

私は無視し続けたけど、扉の向こうにいる人間は叩くのをやめない。

ゴンゴン！ ゴンゴン！

だんだん怖くなってきて、警察でも呼ぼうかと考えたけど、よく、注意して扉を見るとすりガラスに小さなシルエットが浮かんでいた。

「子供？」

私は泣きすぎて腫れぼったい、赤く充血した眼のまま、扉の鍵を開けた。

ゆっくりと扉を開く。

「……………え？」

そこにいたのは、

鹿の頭をかぶった少女だった。

鹿野奈緒（後書き）

今日のキャラクターの一言。

正道＆洋子「まさか、初登場で死ぬなんて……」

鹿野奈緒2

歯科で鹿と鹿野が見つめ合う。

奈緒「……」

鹿「……」

「えっと、ごめんね、いまウチはお休みの。歯医者さんなら他を探してもらえないかな？」

「なんでやねん……」

「え？（どうして鹿が関西弁？ 奈良だから？）」

「なんで笑わない！ 鹿野歯科に『鹿』が来たんだぞ？ 笑つかツッコむかのどちらかだろう」

「え？ え？ え？」

「ああ！ もう！」

鹿を外すと金髪の少女が現れた。

背格好で女の子であることは、奈緒にもわかっていたが、少女は奈緒の想像以上に目鼻立ちの整った美少女だった。

「正道と洋子はいないのか？」

「え？」

「まったく……お前は『え？』しか言えないのか？」

「だって……いきなりすぎて……」

「んー、それもそうか。自己紹介もまだだったしな。俺は野村幸子。正道と洋子とは友達だ。俺は正道の育った孤児院で育つてな。今でも正道がちよくちよく遊びに来てくれるからそれで仲良くなった。二人は出かけてるのか？」

「……お父さんとお母さんは死んじゃったの……」

奈緒は、突如訪ねてきた金髪の少女にこれまでの経緯を話した。父親の正道が育った孤児院は静岡にあるというのは昔聞いていたし、

そこに放っておけない少女がいることも奈緒は聞かされて知って

いた。

たった一人で東京までやってきた少女には辛い事実であっても、本当のことを話すのが誠意だと思ったからだ。

「そうか……死んだのか……」

幸子と名乗る少女は正道と洋子の死を聞いても泣かなかった。

表情から深い悲しみに迫られていることはわかったが、

それでも、少女は決して涙を見せることはなかった。

二階。

二人の寝室。

二人が死んでから開けることのなかった部屋。

そこにはいまだ両親の温もりが残っているようだった。

奈緒は幸子を連れて扉を開く。

大きなダブルベッドと部屋の端には机と書棚に医学書が多く並べられていた。

幸子と奈緒は机の傍まで足を運んだ。そこにはいくつかの写真が飾られていた。

ニューヨークでかつて出会った時の写真。

ウェディングドレスを着た美しい洋子と笑顔で寄り添うタキシード姿の正道。

幼い奈緒を抱えた洋子の写真。

家族三人の初めての家族旅行の静岡の写真。

そして、

幸子を交えた四人で写る写真。

「そっか、幸子ちゃんてあのときの……」

「そうか、君が奈緒か……女というのは四年も会わないと随分と変わるものだな」

「幸子ちゃんもすぐに美人さんになるよ」

「ああ、そんなことはわかってるよ。大事なのはどんな美人になるのかということさ」

「クスッ！」

自然と奈緒の顔に笑みが戻る。

それは両親を亡くして以来、初めての出来事だった……

「どうした？ 何が面白い？」

「あ、ごめん……幸子ちゃん面白いなって」

「俺が？ ……そうか、面白いか……それは最高の褒め言葉だな」

幸子は感慨深げな笑みを浮かべるとベッドに腰を下ろす。

「奈緒。君はこれからどうするつもりだ？」

「え？」

「歯科のことさ」

「……歯科のことって言われても……下の施設を誰かに貸すというのもあれだし、第一、私にはそういった知り合いはいないし……」

「なら、奈緒が継げばいい」

「え？ 私が？」

「そうだ。無論、奈緒にその意思があればだがな」

「私は……」

「俺も出来る限り力を貸す。というか一緒に頑張るから」

「一緒に？」

「ああ。俺と奈緒の二人で鹿野歯科医院を復活させるんだ」

「幸子ちゃんはどうしてそこまで……」

幸子は奈緒から視線を外し、少しだけうつむいて、

「……俺の短い人生に正道と洋子は決して少なくないものを与えてくれた……その恩返しを、俺はまだ、何一つできていないんだ」

「幸子ちゃん……」

奈緒もベッドに腰を下ろすと、隣に座る幸子の金色の髪を優しく撫でる。

「やってみよつか……」

「ん？」

「どこまで出来るかわからないけど……せっかく改装したんだし、お父さんとお母さんが築き上げてきたもの、ここで全部やめたらもつたいないよね」

「ああ……そうだな。よし！ その意気だ！ じゃあさ、とりあえずお願いがあるんだけど」

「？ なに？」

「孤児院に連絡してもらえるかな？ 俺、抜け出してきちゃったんだよね！ てへっ！」

「えーーーーー！」

鹿野奈緒2（後書き）

今日のキャラクターの一言。

幸子「俺って大分男前だよな……」

休診日3

「あれあれ？」

「どうした奈緒？」

「カズ君はどうしたんですか？」

「ああ……あいつは療養中だ。まあ、今日は休診日だし、あいつが来る理由もないがな」

「じゃあ、今日は私と先生の二人ですか」

「そういうことになるな。で？ 初めての主役はどんな感じだった？」

「どうって言われても、あまり楽しいお話じゃありませんでしたし……」

「まあな……ちなみに過去編は前回ののでおしまいだそうだ」

「え？ 早くないですか？ その後のドタバタと幸子先生の過去は出し惜しみですか？」

「作者的には過去のシリアス展開は長くやり過ぎない方が良いという考えらしい」

「じゃあ、過去の話は今後何回かに分けて書くとかそういうことなんでしょうか？」

「そういうことみたいだな。プロの作品と違って打ち切りがないからそこら辺は融通が効くみたいだな。ちなみにそういった構成は週刊少年『跳ねる』の『お助け踊り』に影響を受けているらしい」

「ええ！ そういうこと言っちゃうんですか！ さすがにどうにかなっちゃう気がするんですけど……」

「いやいや、明確に何かをパクッたわけでもないんだ、大丈夫だろ」
「なら言わなきゃ良いのに……」

「さてと……次回からまた日常の話に戻る訳だが……」

「訳だが？」

「ネタがないらしい……」

「結局そこですか！ その話はカズ君と前にしてるじゃないですか」
「いやね？ ないこともないらしいんだけどね？ 後先考えずに行くのは如何なものかと」

「だいぶ今更なこと言いますね……」

「ただいま戻りましたー」

「あ！ カズ君！ おかえりなさい」

「うわ！ 黄金の右！ な、ななな奈緒さん。お願いだから今日は暴力に訴えるのは無しですよ？」

「？ 何を言ってるんですか？ そんなことした事ないじゃないですか」

「（前回のことはなかったことにされてるのか？）」

「そつだ！ 詩織ちゃんもたしか足技がすごいんだよな。で、奈緒も強い。ここからはバトル重視で行くのもありだな！」

「幸子はまた作者目線で何を言ってるんだ。それじゃあ、俺と幸子はどうするんだよ」

「俺は必殺の右ストレートがあるからな。カズは別に弱くても良いじゃん」

「良くねえよ！ 俺だってどちらかというとかっこいい主人公が良いんだけど」

「無理だ」

「……なんでだよ」

「おまえこの小説のあらすじになんて書いたか知ってるか？」

「……………」

「おまえはただの歯医者嫌い。それ以上でもそれ以下でもないのだ」
「ぐっ！」

「良いじゃないですか！ カズ君はおとなしく私と詩織ちゃんのサンドバッグになっていればいいんです」

「さらつとすごいこと言ったよ！」

「だって、この前すごく気持ちよかったんです……」

「いやいや……なにうつとりしちゃってるんですか！ 俺、割とボ

口ボロだったんですけど。って、きつちり前回のこと覚えてるし！
なんでさつきはしらばつくれたんですか」

「バトルものにするならどうやってその方向に持って行くんですか？」

「あー、都合が悪くなると俺を無視するのやめませんか？」

「そうだなー、ある日、鹿野歯科医院に飛び込みの患者がやってくる。その男は実は裏社会と繋がっていて……みたいな感じか？」

「……」

「わー、面白そうですね！」

「そして、引き裂かれる鹿野歯科の面々。暗躍する菊池。囚われるミシェル。山田の歌が世界を救う？ 果たして幸子たちは再び日常を取り戻すことができるのか！ みたいな感じだな」

「わー、わー！ 次回がとっても楽しみですな！」

「やらないからな！」

休診日3（後書き）

今日のキャラクターの一言。

カズ「次回からはまた普通に帰るらしいですよ？ 多分……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7404u/>

鹿野歯科へようこそ!

2011年8月21日03時31分発行